

雅語俗録 肆

中野, 三敏

<https://doi.org/10.15017/4741877>

出版情報 : 雅俗. 4, pp.184-196, 1997-01-31. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :

雅語俗録 肆

中野 三敏

二十一 板木株式賣渡証文

右板木株式共我等所持罷在候処、此度代銀五拾五貫目ニ相定、永代賣渡、則銀子儘請取申候所実正明白也。若外より故障申者在之候得者、当人加判之者共罷出、急度埒明、貴殿江少しも御損難相懸申間敷候、尤相残ル板木壹枚も無御座候、為後日板木株式共賣渡証文依而如件

万延二年酉二月

村上勘兵衛判

母妙順判

妻もと判

弟善助判

証人吉野屋重助判

井筒屋茂兵衛殿

前文之通相違無御座候以上

経師年番

丁子屋宇兵衛判

大和屋勘兵衛判

右を奥書とし、その前におゝむね仏書類の板木四十五点を列記す。殆んどが丸株なるも、止板壹枚から五枚の分も四点あり、止板は板本一部につき三步から五歩の板賃を取る旨の注記あり。又、袋・題簽の分の板凡てを一点、看板の板木を一点として記載す。

村上勘兵衛は老舗平楽寺なるべく、明治に入りても仏書刊行に著名なりし故、万延の売渡しは如何なる事情によるものか知り難けれど、「東叡山凌雲院慈海僧正校正板木株類一式」と首にあれば、その分のみの賣渡しなるべく、ともあれ賣渡証文なるものの実例珍らしければ、平成七年冬の古典会下見会場にて立ちながら写す。



平成七年古典会入札目録より

日本記御書ぬき被下、御多用中有かたく奉存候
 蛇の道のへひと成りたる田の道を

しるはとかけに似たる君かな

手柄岡持

八月十五夜空いと晴わたりたるに、人々とひ来て歌よみけるとき、哥十五首よめりとて見せ給ひぬ。その哥のうちには彼の床にうきねしてすみた川原の月を見てしかなとよみ侍れと、彼のうへにいね侍らは、まこもの中より藪蚊てふものゝいて来て、こゝかしこくらひ侍るへし、されは一夜をしものなくて彼の上にて月を見らるへきか、哥てふものはいつはりのみいふ物そと、ひとり笑ひ侍るなど聞へ給ひし、けにさることそかし、やつかれもとより哥よむすへもえしらされは、えその千嶋のゑみし哥もて、十五首の哥を和し奉れる也、君かよみ給へる十五首のうちには、彼やふ蚊のはしのはしく、さしもしらぬことの葉もあなれと、嶋のからだの嶋人も都鳥めきて哥よみけるは、その齧のあとの

あかくはれわたりたる月の興とも見給へかし

なへて世の人の心もすむ月も

空にみちぬる夜はにもある哉

すむ月も空にみちぬる夜はなれば

なへての人の腹もはりつゝ

夕汐にうかへる月の桂かち

大江のみに今そよすなる

渡辺や大江の千里の月見れば

みとにより来ぬ綱もあらなくに

我そのゝ小萩か上の露すらも

名におふ夜半の月を待けん

月を待つ小萩か露は袖ふれる

まつきのもとのたをやめの如

露ふかき軒にはへる蔦かつら

くる秋ことに月そやとれる

月も露もとくやとれとや蔦かつら
秋の軒端にはひのほりけん

数ならぬ庭の苔路の露をさへ

とめてやとれる夜はの月哉

それ／＼につきあひ照らす今宵とて

庭の苔路の露ももらさし

定なき秋のみそらの雲さへも

こよひは月に心ありけり

おほやけに名高き月のけふの雲は

はたてとも云はし酒手ともいはし

こよひしも筏の床にうきねして

すみた川原の月を見てしか

こよひしもすみたかはらに月を見は

すみたはらこそかやりなりけれ

玉すたれかゝくる宿も何かせん

軒はの蔦の露の月影

玉すたれかゝくる茶屋も何かせん

蔦屋か軒の関の月影

さはるへき山の端もなきむさし野は

月見るための所なりけり

さはるへき山の端もなきむさし野は

月見るための向ふ棧敷か

ことほりの夜はなりなからかく斗

くまなき月の影は見さりき

かゝる月は見さりし月を今宵見は

なゝそいつ日はゆらく玉の緒

あすも見ん月とは思へと同しくは

こよひなからにあげすもあらなん

ほりす如こよひなからにあげなくも

月はならはて入らは何せん

いつはあれと秋の半の中そらに

くまなくすめる月を見る哉

秋のなかはくまなくすめる月は君か

なかむる顔と見るへかりける

あはれしる今宵の月の影のみそ

八重むくらをもへたてざりける

へたてしな今宵の月の影のみは

八重むくらをもつまみ喰ひをも

とへかしと思へは人のとひ来つゝ

同し心を月に見るかな

あるは又思はぬ人のとひ来つゝ

異な顔つきを月に見るかも

名におへる今宵の月のくまなきに

千たひあふともあく世あらめや

くまなくは千たひあふともあくよあらし

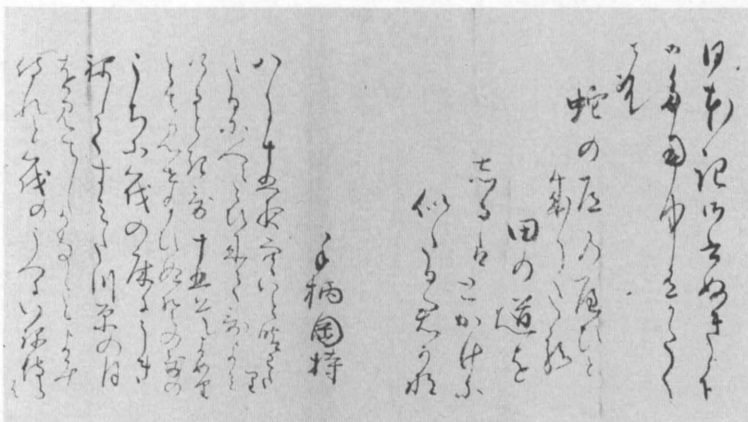
月の匂ひのおくびしつゝも

千蔭芳君

几下

右岡持手紙の一紙、千蔭哥十五首は「八月十五夜空いと
はれわたりたるに、人人とひきてともによめる十五首」
の題にて、すべて『うけらが花』卷三にあり。句文全く
相違する所なきは、千蔭の自信作か。しかも「哥てふも
のはいつはりのみいふ物そ」の述懐面白し。対して岡持
狂歌、初めの「とかけに似たる」は秀句といふべきも、
十五首は、精彩を欠くといふべく、さすがに岡持ほどの
名手にしてなお、狂歌にかゝる連作は不都合なりしとみ
ゆ。狂歌は一首のみの言い捨てこそよけれ。それにして
も、岡持の文章は長し。「蛇にぞ似たる」といふべきか

22



二十三 歌麿の出自

春川五七の春画帖『吾妻男京女郎會本手事之発名（ゑほんてごどのはな）』は、名のみあらわれて、その実、紹介されしものを見ざるは、ものごものだけに無理もなし。さあれ、大錦版丹表紙一帖、十二番の絵につぐ十一丁に及ぶ跋文は、いかにも讀本作者神屋蓬洲としての面目を示し、伝奇小説一齣と称すべき趣向の文章となる。中にも興をひかるるは序文一丁の次に置かれし附言一丁分の中味なるべし。

附言

此書は吾妻男に京女郎と云へるに效ひて、男は江戸風に、女は京風に造りたる処なり。されば流行めける往土絵姿に競ては、女子の粧古風に見ゆれど、直よかに賤しからぬは、自然京都の風なればなるべし。予従来美人画を好きて、古今の写意を訂るに、往古は云はず、中頃我が京師に西川何がしと云者ありて工に造りたるが最よし。其後また京師に、露章と云へる画工

あり。壮年に関東へ下りて此人もつとも美人画の妙手にして、江戸画工古人春潮と云へる者の筆意に效て、多く會本を造れるに、其風其情、至らざるはなく尽さざるはなし。實に古今の名人と云べし。但女子の婉然なるを宗として写したれば、彼の僧正が歌のさまならねど、観る人をしていたづらに意を動ぜしむ。夫が類にはあらざれど、予が此會本をものして直よかなる京女郎を写せるは、ひとへに今めかしたる江戸絵姿の婉々ならで悪らしきをばぶき、慈に中頃の好きを採而曰。さはあれ中々に目なれざれば、流行におくれしなどいふべけれど、京都の女郎の美き模様を、識る人はしるなるべし

玉門姪土重しるす

歌麿を京都の人とし、初号を露章とし、初め春潮の筆意に效うとするなど、何れも聞なれぬ証言、されば春本研究の鬼林美一氏の言やいかにと近刊『喜多川歌麿 続』を見るに、大正七年「浮世絵」41号の朝倉無声の言を引きて、享和・文化頃の上方版「會本手事の発名」に「京

都に露章と云へる画工あり、此年関東に下り喜多川歌麿と号す」とある旨の記述あり、原本は八方手を尽して捜索中とあり。林氏にして未だ原本を御覧にならぬとあれば、せひにも本文の全容を示すべきかと、柄にもなき紹介に及ぶ次第。林氏の手による紹介文が既になされていゝるやもしれぬ。その際は御容謝

附言
 此書ハ吾妻傳ノ京女郎ト云フ小短シク
 別ハ江戸風ノ女ハ京風ト違フモノハ悲シク
 さまざま流行の徒ヲ増テ競クハ女子ノ
 穢カ成ル見ゆモノ画工ノ職ノハ如何レ
 京舞ノ態も亦多クテ不徳未美人画と
 中頃我々京師ト西川何ト云テありト云
 畫工ノ家トシテ其後キ京師ノ露章
 といフ画工ノ名ハ京師ノ名ト云テ人
 画ノ妙ナリト江戸画工ハ人々京師ノ筆業
 效ク多ク會風ト違フモノ其風ヲ情シク
 似ク畫スルハ京ノ名ノ名ノ云ト
 似女トシテ京舞トシテ京ノ名ノ名ノ
 傳京歌ノ名ハ何ト觀テんとシテ其ノ名
 動テト大變トありト云テハ會風ト
 似レテ直ニ京ノ京舞ト異ナリト云
 今めト云テ江戸傳奇ノ名ハ何ト云
 今ハ京ノ中頃ノ習キハ機命ト云われ
 中頃ノ習キハ流行ト云フモノト云
 今々京ノ京師ノ名ハ何ト云テ
 人々京師ト云テ

二十四 直養『金石志』稿本流転始末

西田直養、天保九年『金石年表』刊行の直後、直ちに銘文の全部及びその考証を加えし一書を編み『金石志』と題せし稿本一冊あり。半紙本九十丁ほど、滿紙に附箋、注記あり。なお成稿迄にはかなりの手入れを必要とするが如くなれども、巻頭には十項に及ぶ「著述体裁」なる例言風のものも備え、相当に想を構えしものなること明らかなり。その見返し一面に細筆にて、本書流転の奇聞を記す。かたぐい面白ければ左に移写す

此書は余四十七才、日ヶ窪疾ノ傳たりし時、屋代翁と時々出会、稿を起せし也。然るに天保十亥秋、京邸監となり、彼地ニ五年居り、諸説を集め、又辰春大坂邸監となり、かの地にて池田なる山川大三郎と親くなり、此人の考を乞ひしに大ニ益あり。又広道の考もあり。申秋晝鐘成か西国卅三所図会かくとて、河内あたりの古物の事しるすに、余説をとこふまゝ、此書貸したりしに、余考数々其書に出し上木せり。西秋小倉に帰る

により、かへすへきよし申遣しゝに、さいつ頃使にわたしぬとの事に而、僕者しらへ見しに一人も(破レ)し者なし。第一余請とらす。只々不審にて、天保九戌年筆をおこし、酉年(破レ)十二ヶ年も筆加へ書入せし一冊紛失の事、残念なれともいたし方なし。かくはかり丹誠こらしゝものなれば、是非く上木、兼而の好事の名、海内にひゝかせんとおもひしも水の沫なりに、今年八月十五日、文字祭参詣のをりから、風なみあしくて馬関の方に舟ふきよせられしに、をりふし知己なる伊藤盛友、海岸に出あひぬ。幸也、此地に石井節哉とて老医あり。この人かねて和歌に志したるを、いかて君か門人にとかねてこひぬ。この処よりほとちかし、一寸ともにゆきて老人よるこはせたとて、むりに袖引てゆく。風はまなしはけしく、船行決していきぬ海上なり。おもふ、湊に船かゝりしつとも興もなし。さらは其家とはんとてゆきしに 主人大慶、種々もてなし、当座の題など出し、四方山の物語するうちに、主人のいはく 君か先年物したまひし金石志を、五六年已前にある人より得たり、定て其後清書いてき

しならんといふ。いといふかしく、そは誰人より得たまひしやとへは、大坂人平田秋足といふもの、此地に滞留、病氣に而薬あたへしに、薬代のかはりとしてえさせぬといふ。其時の嬉しさとふるに物なし。元弘天皇の名和が船見つけたまひしおもひやりぬ。考るに秋足、おのか使と偽り奪ひしにたかひなし。さて主人にこひてもらひぬ。主人へは薬代つかはさむとて盛友にはかりつかはしつ。清書上木せんとす。

いにし天保九戌年に筆おこし酉年まで書入せしを、今年九年目に此書手入りぬ。二十年目となるも一奇也。文字八幡宮に参詣せずは舟馬関にふきよらじ。さなけは盛友にはあはじ。又節哉翁の門にいらんとおもひしも奇にて、此書是まで人にやらす、筐中に秘おきしも妙也。清書ならば又々翁につかはさんとす。翁もし余にあたへずは、いかおもふともいたし方なし。是も文運擁護の菅神の御かけにて文司にはまゐらせたまひしものか、早々清書して上木し、一本神庫に奉納すへし

安政四巳八月十九日記 直養

日が窪侯は豊前小倉の支藩新田藩主篠崎氏、麻布日ヶ窪に上屋敷ありしなり。池田の山川正宣には最も親炙せしとみゆ。大坂人平田秋足、下関の伊藤盛友、石井節哉何れも知る所なし。直養は幕末九州の文人中の尤物、既に「門司新報」誌に玄海生によるその伝を見るも、尚不足せる部分多きを憾みとす。『金石志』につきても、本書より更に礎稿と思しく、本文も本書の四分の一ほどのもの一本につき述べられしのみ。要するに、その詳伝のあるべくして未だ果されざる最右翼の人物といふべし。

『金石志』の書入れ、尚面白き節々あり、例えば

狩谷氏は実に此道の本居也。貞幹を契沖とし、世肅を東丸とし、弘賢を真淵とし、望之を宣長とす。其余諸家ありと雖も此四子を目して好事の四大家と唱へし

面語の説は屋代翁を本とし、書冊の論は椽斎による。

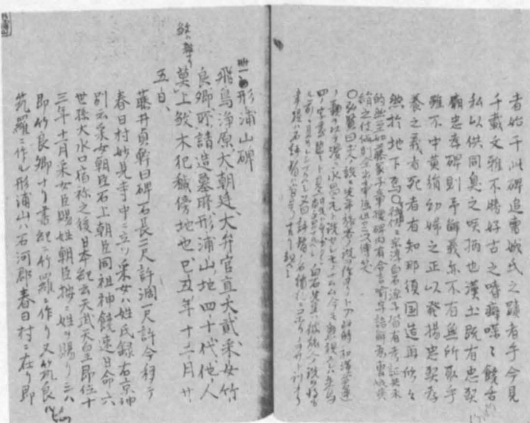
若椽斎の故京遺文なかりせば此書ならず。若屋代翁といふ人あらずは此くはだてはいできざといふ事、凡例にかくべし

本書、もと小杉楹邨博士の蔵なりしこと、竹清翁『本
 の話』にあり。但し今、本書にその蔵書印は見えず、或
 いは又、別本か。

24の①



24の②



二十五 政美十五歳画

蕙齋びいきにおいては人後におちざりし天童漆山氏の「北尾政美と其の作品」に、その画績の最初のものとして、従来『浮世絵師伝』に引かれたる安永九年、十七才説を訂し、安永七年板、二冊物の黄表紙の落咄に「北尾重政門人三治郎十五歳画」とせしものあり、という。但し所見本は佚題にて、柱記は「はなし栄」とあり、栄邑堂板なりし事はわかるが、三十年も前のカードに抛る所見で、原本の所在は不明といえり。今、その原本らしきもの、但し、一冊のみ。表紙は一面に松と竹を緑に刷りつけ、題簽は、これも剝落。但し、左肩に短冊簽の跡のみあり、全七丁。柱に、初めの五丁分は「はなし 栄」、末の二丁分は「はなし 栄邑堂」とあり、丁付も首丁から「四・五・七・八・八・九・十」とありて、この手の本には珍らしからざる撮り合わせ本なり。但し原装ゆえ、後人の撮り合わせにはあらずはじめからこの体裁を以て賣り出せしとみゆ

因みに、天童氏曰く、「政美は飄逸なところは浮世絵

の南画」と、言い得て妙なるべし。無論、十五歳の画を目していふ所ではなし。

25



二十六 帳綴じ本、大和綴じ

西鶴本について八文字屋の本造りには種々の新機軸を見る。要するに近世小説板本化の青年期ともいふべき時期ゆえ、いはゞ当然の事かもしれない。但しその中でも横本型の数点にのみ（例えば『傾城禁短氣』等）、通常の縦型袋綴じ半紙本を、そのまゝ横にして右辺を綴じた形のものあり。従つて板心の折り目の部分が、縦綴じなれば左辺にあるべき所を、下辺に横になりて存在する形となる。大福帳などには普通に見るものにて、小説讀物類の板本には、この八文字屋本以外には絶えてみぬものなり。過日、板本書誌の手引き書を作りしとき、この類の造本を何と称すべきか、困りしことあり。リンボー先生既にこの様式の特殊性に着目し、「横綴半紙本」と命名ありしも、通常の大美濃版二つ切りの横本も同じく横綴じの半紙本型となるゆえ、その区別出来ず。たまく青裳堂版「日本書誌学大系」の近刊竹清写『欣賞会記録』を見しに、その第一回（明治四十年十月五日夜於本所横網安田邸）記録中に、「林若樹子手記」とありて、「帳

綴本八文字やにあり」と記さる。即ち右の例をいうなり。簡潔直截、一件落着せり。恐らく「大福帳綴じ」の略称なるべく、八文字屋本にはまことに似つかはしく覚ゆ。

同じ所に並べて「大和綴又列帳綴」ともあり。これ又、従来の書誌学には「列帖」「綴葉」「列葉」云々と種々呼びならされ、紛らわしきもの。その場合「大和綴じ」の称は又別の結び綴じのものに用いられしを、田中敬氏の『粘葉考』（昭和七年刊）に、列帖の綴じ方の本邦独特なる点を考慮して「大和綴じ」の称こそふさわしと断ぜられたりしが、明治の本好きは既にこの名称を通称としていたりしこと、これによつて知り得たるも欣ばし

二十七 紀百七老人事

過日、初めて佐渡に遊び、佐渡高校に萩野文庫を訪う。九大図書館蔵萩野文庫と兄弟にあたれば、ひとしをの感あり。中に博士自集の『浜ながし』と題する叢書あり。盆の供物の浜に流し捨てられたる中より遺珠を拾集せしもの意なるべきも、多く『佐渡国群書類聚』と柱に刷

り込みたる野紙に書かれたるは、博士の企及せらるゝ所もほのみえて床し。目をひかれしもの数々、中に一則。

紀百七老人事

東都牛籠筑戸神祠前、幕府士人青木氏家有一老人一百余歳者、始仕其家為家長、既老致仕、耳目聰明、康強如壯時、為人宏達、好諧謔。近就師学俚謠淨瑠璃者、師之家距老人之家里餘、而老人日致其家受數曲未嘗少廢也、傍近奇之、併稱其師、師始貧窶、自得老人聲價噪時、家貲頓豐、都人競傳欲見老人者多矣、是以戸外履常滿、初老人親栽瓜于後圃。六月某日為其誕辰而瓜方熟、老人自摘之以與其來賀者、其子又已七十余歳、子孫衆多。闔家幾十有五口、老人筋力猶壯。平時居家自執春碓之勞、以當攝生云、戊申秋叔父鹿野君、以上計吏在東都、一日渋谷采女君臣村松氏來晤并贈老人書延壽盃三大字、末尾題曰一百七歳老人飯田潤書、筆力蒼勁、極可愛玩、叔父君寄書家君報其事。而予又與聞夫世之稱寿者者多出於荒山窮海之間。而至都会則甚鮮矣、如老人者則不然。生長熱鬧之地而能躋眉寿之域

豈其天質強壯無所勤而然耶。抑亦有別所自得者耶。予故記之以広異聞云。

藤木穗記

文中、「戊申」は天明八か嘉永元年、恐らく嘉永なるべし。

近時、百余才の老人は別に稀らしきことも無けれど、嘉永の江戸にては奇聞の一となり得しも尤なり。畸人天愚孔平は文化十四年没。百一才と墓石にはあり、本人は百十才と自称せしものもありて、百歳老人なることを大いに吹聴したれども、実は没年時八十五、六なりし事は、過日考証せしことあり。

この飯田老人、牛込筑戸八幡傍の住とあれば、天愚の住居とも程近し。案外老人クラブの交際ありしやもしれず。或いは又、天愚の大ボラはこの老人への對抗心かも知れず。